

人を幸せにする ものづくりに 携わりたい

ニチバン株式会社勤務

角坂 実保さん KAKUSAKA MIHO

2018年 東京理科大学理学部第一部化学科を卒業。2020年 東京理科大学大学院理学研究科化学専攻を修了。同年、ニチバン株式会社へ入社し、研究開発本部 テープ製品設計センターに配属される。2023年4月より研究開発本部 イノベーションセンターに異動し、現在に至る。

入社4年目で、 イノベーションセンターに抜擢

ニチバン株式会社で研究職として働く角坂実保さん。

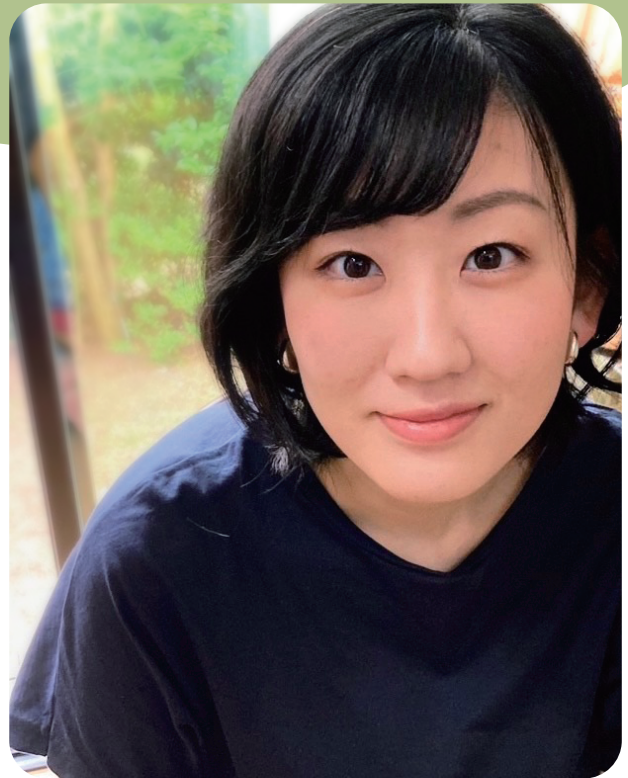
入社してすぐに配属されたテープ製品設計センター(2021年度より製品設計部に統合)では、粘着テープの新製品や改善品の設計を担当した。

「先輩たちが優しくて仕事はとても楽しかったですね。ただ、大学の研究と違い、事業性が見込めなければ、設計途中でも打ち切りになるという厳しさはあります。お客様に満足していただける品質とコストをいかに両立させるかは苦労するところでもあり、面白さでもありますね」

入社4年目の今年、転機が訪れた。研究開発本部イノベーションセンターに異動が決まったのだ。

ニチバンといえば、救急絆創膏「ケアリーヴTM」や定番文具である「セロテープ[®]」など、粘着という技術を使った商品がおなじみだが、イノベーションセンターでは、これまでの社内の“当たり前”から脱却し、全く新しいものづくりにも挑戦する。

「社内のノウハウだけではできないことも多いので、社外の企業やスタートアップ企業、研究者などと協業をして、従来にはない発想で、新しいビジネスのタネを探そうとしています。日々、新しい知識や技術、人



に出会えることが刺激的で楽しいですね」と顔をほころばせる。

会社からの期待も感じている。

「私たちが取り組んでいるイノベーション創出は、会社の中期経営計画の重点項目の1つにも挙げられています。会社としては未知の分野への挑戦も多く、社内に知見のある人が少ないことも多々あります。プレッシャーはありますが、新しい事業や製品を創ろうとすることに、とてもやりがいを感じています」

小学生の時に白衣を着た経験が 理系への興味を発端

埼玉県の自然豊かな町で生まれ育った角坂さん。4歳違いの弟はインドア派だったが、角坂さんは外遊びが好きな活発な子どもだった。とても負けず嫌いな性格でもあり、小学校1年のときにマラソン大会で2位だったことが悔しくて必死で練習し、翌年は1位になった。その後も負けたくないで、両親に頼んで陸上のクラブチームに入れてもらい、卒業まで1位をキープした。運動だけではない。書道の作品が県の展覧会で金賞をもらえなかったことが悔しくて、お習字を習わせてもらったりもした。

「やりたいことを何でもやらせてくれた両親には感

謝しています」と角坂さん。その一方で、勉強をしなさいと言われたことは一度もなかったという。

化学に興味を持った最初のきっかけは、小学校の頃のこと。「母が、入浴剤の会社が主催するイベントに応募した結果当選し、入浴剤を好きなように配合して自分だけの入浴剤を作るという体験学習に参加したのです。白衣を着て、薬剤を混ぜると色や香りが変わる。すごい！と感動しましたね。その時の感動と、白衣への憧れから、実験や化学に興味を持つようになりました」

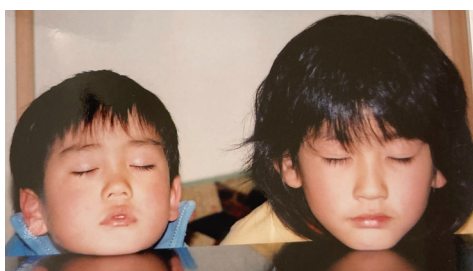
理科がさらに好きになったのは中学生の頃。「ゆとり世代で授業時間は少なかったのですが、短い時間の中で、理科の先生がかなりの回数の実験をさせてくれました。理科の一番楽しいところを経験させていただいたことが、理系へ進むきっかけになりました」

中学までは公立学校だったが、「生涯で女性ばかりのコミュニティにいられるのは高校時代しかない」と思い、私立の女子高（淑徳与野高等学校）に進学。「この時にできた友人とは今でも頻繁に会っていますし、毎年一緒に旅行するくらい仲がいいですね。また、私立は先生の異動がほとんどないので、いつ訪ねても知っている先生がいて、相談にのってもらえるのは良かったと思います」。実際、角坂さんは、進路に悩んだ際に母校を訪れ、先生に相談したこともあった。

東京理科大の充実した設備と 明るい雰囲気の魅力を感じて

角坂さんが在学していた頃の淑徳与野高校では、1年生から文理選択があった。角坂さんは迷うことなく理系を選択。大学進学にあたっては、「進路相談で先生と話している中で、化学の分野で何か新しいものを作りたいという希望がかたまっていました。大学よりも学科が先に決まり、化学科のある大学に絞ってオープンキャンパスに行きました」

いろいろ回っているうちに、せっかくやるなら設備が整っていて実験器具が豊富な大学がいい、施設もきれいなほうがいいとイメージがかたまってきた。「東京理科大学は、理系に特化した総合大学ですし、キャ



4歳違いの弟（幼稚園の頃）と。「この頃は弟と声も顔もそっくりでした」。



小学校の頃、企業の懸賞に当選し、白衣を着て調べ体験に参加。「後に理系に進むきっかけとなりました」。



小学生の時、初めて条幅紙に挑戦した書道が、県書道展で金賞を受賞。夏休みに全身を真っ黒にして毎日のように練習した成果。

ンパスも新しくきれいでした。他大学では理系の学部はちょっと暗いイメージがありましたが、理科大は雰囲気明るかったこともよかったですね。決め手になったのは、オープンキャンパスで研究室の中まで見学できたことです。こんな環境で研究がしたい！と、とても魅力を感じました」

2014年4月、晴れて東京理科大学理学部第一部化学科に入学。通学は埼玉の実家から。片道2時間近くかかったが、6年間休むことなく通った。

「真面目な人が多くて互いに切磋琢磨できる環境だったのはよかったです。理科大は関門科目があり、留年が多いイメージをもたれることが多いですが、その分テスト前の一致団結感がすごいんです。自習室は常に満杯で、先輩や同級生と情報交換をし、互いに得意な科目を教え合って試験勉強をしていました。そのおかげで、私もなんとか留年せず進級することができました」

勉強以外で熱心に取り組んだのは、学園祭実行委員会の活動だ。「学園祭実行委員会では、いろいろな学科の学生と仲良くなれますし、大学の外部の人たちとも知り合えるのが楽しかったですね。私は芸能人を招いたトークショーを担当し、企画書の作成や出演者の選定・交渉、大学側との調整など、普段の学生生活では得られない経験をたくさんすることができました。なかでも、本番の日に会場を埋め尽くすたくさんの人たちの笑顔は、今でも忘れられない思い出。辛かった準備の日々をすべて忘れるほど感動しました」



高校生の頃、弓道部の夏合宿にて。

迷った末、大学院に進学 社会人になっても役立つスキルを 身につける

4年生になり、佐々木健夫先生の研究室に所属。液晶や、光を当てると硬化する接着剤など、光に反応する有機化合物の研究に取り組んだ。

教職課程も履修していて、卒業後は教師になるか、企業に就職するか決めかねていた。

「企業に就職する場合は研究職で就職したかったのですが、そうなるとエントリーシートでも研究内容についてかなり詳しく問われます。しっかりと記入ができるくらいの経験や実績が必要ということに気づきました」と角坂さんは振り返る。母校の高校の先生にも相談してみたところ、「これからの理科教員は院卒でなければ通用しにくい時代になると言われたこともあり、大学院への進学を決意しました」。

「大学院では、学会発表や研究室内の定期報告会、海外の論文を読んで要約しその内容を紹介する雑誌会など、報告や議論を行う機会がたくさんありました。報告書の書き方も発表の仕方もわかりませんでした。数をこなすうちに、いかにして人にわかりやすく話すか、議論に持ち込むために論点をどうまとめるかというスキルが身につきました」と角坂さん。また、「大学の研究室で学んだ実験の基礎的なスキルは、ジャンルが違っててもどこでも通用するスキルなので、企業に入ってから、とても役立ちました」

佐々木先生は、気さくで学生との距離が近く、1年に1度、自宅に研究室の学生たちを招いて食事会を開催してくれたという。「管理栄養士の奥様と佐々木先生の手料理がすごくおいしくて。これまで食べたことがないような、おいしいスープをいただいたことは今でも忘れられません」



卒業後も頻繁に会っている高校時代の友人と。香川県の父母ヶ浜にて。

教職か、企業の研究職か 決め手になったのは恩師の言葉

修士課程も1年を過ぎた頃、再び角坂さんは、進路に悩み始める。「企業で研究職に就きたいと思いましたが、一方で、教員になる道もなかなか捨てきれず、すごく迷いましたね」

大学院時代、母校の高校から声をかけていただき、母校で化学の非常勤講師をしていた角坂さん。さらに、個人塾や家庭教師のアルバイトもしていた。「ある、理科が苦手だった生徒が、私の指導でどんどん理科ができるようになり、他の教科も伸びていきました。『わかった』という生徒の顔を見るのが嬉しくて、“教える”ことにとてもやりがいを感じていたのです」

このときも母校の先生に相談すると、「社会人になってから教員になる人はたくさんいるが、教員になった後に社会人になる人はほとんどいない」と言われたという。「一度社会に出て広い世界で経験を積んでから教員になったほうが、生徒にも多くのものを与えられる」と考え、企業に就職する道を選んだ。

自分の軸は、 「人を幸せにするものを作る」こと

就活では、理科大のキャリアセンターを大いに活用した。「私はとても心配症なので、他の院生に比べたらたくさんエントリーシートを送っていたと思います」と角坂さん。エントリーシートは、キャリアコンサルタントに助言を受けながら書いた。自分が何をやりたいのか掘り下げていく過程でも、キャリアコンサルタントのサポートがとても役立ったという。



大学に入って初めて化学実験を行った時の写真。



大学卒業式の日に関親と。「祖母、母と代々受け継いだ振袖を着て成人式、卒業式を無事に迎えられたことに幸せを感じました。」

「最初はぼんやりと、『何か新しいものをつくりたい』とだけ思っていたのですが、キャリアコンサルタントの方が、どんどん掘り下げてくださって、『日常生活に関わりのあるモノづくりをしたい』、『どうせ作るなら、人を快適にしたり便利にするものを作りたい』、『人を幸せにするものを作りたい』と、自分の軸が明らかになっていきました」

その軸を大切にしながら、日用品メーカーに絞って、インターンシップや、会社訪問に赴いた。そこで出会ったのがニチバン株式会社だった。

「インターンシップや会社訪問を通して触れ合ってきた人たちが、みんな優しくて素敵な方ばかりで、『この会社は合うのかも』と思いました。ニチバンの企業理念の中にある『すべての人々の幸せを実現する』という一節も、私の軸と近いものを感じましたし、“すべての人々”にはお客様だけではなく、社員も含まれ、『社員から製品を通じてお客様の幸せを実現していく』という話にとっても心を打たれました」

「こういう会社で働けたら幸せだろうな」と思っていた角坂さん、気づいたら、最終面接に残っていた。念願がかない、ニチバンの社員となる。

「最初の印象どおり、社員は優しい人ばかりで、先輩たちには親切に指導していただきました。今の仕事にもとても満足しています」と角坂さん。入社年数に関係なく、意見を言い合えるフラットな環境も気に入っている。イノベーションセンターに配属され、ますますやる気が高まっているのは最初に述べたとおり。

「これまでは先輩に教えられ、先輩のやり方をまねるばかりでしたが、これからは先輩の教を自分なりにブラッシュアップして、自分のスタイルを作っていきたい。私はとびぬけて優秀な人ではないので、できな

い人の気持ちがわかるのが強みだと思っています。後輩に対しても、ここで声をかけてほしいだろうな、丁寧に教えてほしいだろうなと過去の自分と照らし合わせながら声をかけるよう意識していますね」

“苦手”は、好きなことをあきらめる理由にはならない

進路に悩むたびに恩師に相談してきた角坂さんが、もし同じように悩む高校生に相談されたらどんなアドバイスをするのか聞いてみた。

「自分のやりたいことはやったほうがいい。たとえば、理系に進みたいけど理科や数学が苦手だから無理だとあきらめて、文系に進路を切り替える人は多いと思います。でも、やる前からあきらめると必ずあとで後悔します。私も数学はとても苦手でした。理科も、好きだけで決して得意ではありませんでした。でも、“好き”“やりたい”という気持ちさえあれば、“できない”ことは問題ではない。“できない”ことが、好きなこと、やりたいことをあきらめる理由にはならないと思います。あとで『あのときこっちに進んでおけばよかった』と後悔するくらいなら、やれるところまでやってみたらいいのではないのでしょうか」

取材を終えて

「自分は優秀ではなかったが、人には恵まれてきた」という角坂さん。それは、人の助言を素直に聞くことができる角坂さんの人柄が、よい人を引き寄せてきたのだろう。当たり前のようにそれができる人は意外に少ない。私にもその素直さがあれば、人生は変わったかもしれない。

(フリーライター／石井栄子)